

編集後記

社研年報第二六号の編集実務もようやく峠を越しました。

本号は「グループ研究」等からの特集の申し出が無かったため、一般応募論文で編集した形式をとっていますが、栄沢・大谷・伊吹の三氏の論稿はグループ研究「一九三〇～一九五〇年代の思想的・文化的・政治的研究」の研究成果の一部です。書評は慣例にしたがって所員の近刊著書を取り上げ、学外の研究者に執筆を依頼しました。いずれも浩瀚な著作であり、評者にはご苦勞をおかけいたしましたがこの場を借りて御礼もうしあげます。

本号は応募段階では、予定枚数を大幅に超過した申込をいただきましたが、前号での「轍」に鑑み、あえて枚数調整を行わずに原稿を受け付ける方針をとりました。執筆辞退者は必ずしも多くはなかったのですが、最終的には全体の原稿枚数は当初の予算編成段階で予定していた枚数を極端に越えることはありませんでした。幸いにして、所報費の他の科目で若干の余裕が生じていましたので、執筆者にはあえて原稿の圧縮をお願いせず、そのまま掲載することといたしました。

大部の学術論文の一挙掲載の機会が他には少ないという事情をも勘案し、執筆原稿枚数の上限を定めた内規を弾力的に運

用したことをご了承願います。

前号の「編集後記」には「締切から一週間を越えない期間に、ほぼすべての論文が寄せられたことは編集者としてはやや驚きである」とあります。本号も同様のペースで原稿をいただくことができました。社研年報に関しては、締切厳守が「驚き」ではなく、「慣行」となることを期待いたします。締切までに原稿が集まらないということは編集委員のみならず編集・印刷等に関わる諸氏に対して無用の負担を負わせることとなります。また、大学の会計処理上の至上命令である年度内刊行を危うくさせることにもなりかねません。本号の執筆者の方々の御協力にあためて感謝いたします。

編集にともなう実際上の作業に関しては、例年のことではありますが竹内佐和子氏がいなければスケジュール通りに進捗することはなかったと思います。あらためて感謝いたします。また、本号の発行に関しては公人社の大出明知氏にたいへんお世話になりました。末筆ながら御礼申し上げます。

(一九九二年二月記 石塚良次)